



おひざのうえで

(副園長の子育ておうえん通信)(2021年5月)



せんりひじり幼稚園
副園長 安達かえで

「こどもの日・母の日に思う」

こどもの日のニュースで、衝撃を受けました。

30年ほど前は、15歳以下の子どもがいる家庭が全世帯の約半数でした。ところが今は、全世帯の5分の1に減少しているそうです。衝撃の数値です。

2003年に少子化社会対策基本法が制定され、その中の項目の、子育ての新たな支え合いと連携として、子育てのための安心安全な環境や子育て親育て支援社会づくりのお手伝いをしてきましたが、この数値に歯止めがきくのか疑問です。内閣府調査の、少子化社会に関する国際的な意識調査によれば、「あなたの国は、子どもを産み育てやすい国だと思いますか」の質問に対して、日本では4割以上が「そう思わない」と回答していて国際的にみてその割合は相当高いとあります。もちろん子どもを産まないという選択肢もありますが、少しでも多くの人に、子どもを育てることの大切さや子どもの育とうとする力の素晴らしさを知ってほしいと思います。

私の3人の母としての人生は、密度の濃い充実した日々でした。しかし、正直楽ではなく、子育て中は「もう一人自分の分身がいたらいいのに」と何度も思ったほど忙しい日々でした。子どもが成長するにしたがって、子育ては自分の人生そのものになり、子どもの成長が自分の喜びを大きく締めようになりました。子どものおかげで、ママ友ができ、人生の友となりました。子どものおかげで、サッカーの試合をよく見るようになってサッカーの魅力にはまりました。子どものおかげで、絵本を通して豊かな思い出ができました。子どものおかげで、食事の楽しさが倍増しました。子どものおかげで、感動の振幅が大きくなりました。もし子どもがいなかったらどんな人生だっただろう…。日々の小さな喜びや葛藤の積み重ねが、振り返ると豊かな時間をつくりあげてくれたと感じます。

さて、緊急事態宣言下の連休は、家族で過ごす時間が長く、エネルギー満タンの子どもたちと過ごすには四苦八苦されたのではないのでしょうか。兄弟げんかや親子の意見の相違もあったでしょう。人と人が関われば、そこに葛藤が生まれるのは当然です。平和でストレスのない日々が羨ましいと思いがちですが、人が育つには、ぶつかり合いも必要です。ぶつかり合いを解決するために相手の気持ちやどうやったらうまくいくかを考えるからです。それを避けないで、向き合っていくことで子どもも育ちます。「もうめんどくさい…」と思うような関わりも、将来的に意味のあることだと思うと、無駄な時間ではないですね。

発達心理学者のエリクソンは、子どもは育つ過程で右や左に揺れ動きながら自分を見つけていくとあります。自分はいったい何者なのか…そう考えるアイデンティティーが育つには、5歳までは家族や周りの大人の影響を受けるとあります。家族とぶつかり合いながら、自分の考えを持ち、大人の影響を受けながら右へ左に揺れ動きながらスパイラルに育っていく。そう考えながら向き合うと、少し気持ちが楽になるかもしれませんね。